

小学校教育における「短歌づくり」の可能性 II

— 言語感覚の視点からの一考察 —

船 水 周*

Possibility of “Tanka making” in elementary school education II

— A consideration from the perspective of language sense —

Hiroshi FUNAMIZU*

Key words : 想像力	imagination
定型	fixed form
感情	feelings
オノマトペ	onomatopoeia
コミュニケーション	communication

1 短歌の詩型がもつ特異性

短歌は五・七・五・七・七の五句三十一音の音数で構成された定型詩である。五音・七音の二句を三回以上くり返し、最後を七音で結ぶ長歌に対する歌で、日本で最も広くつくられてきた。

短歌は江戸時代まで和歌と呼ばれていた。明治に入り、正岡子規が短歌の革新を唱えて以降、近代詩歌（詩・短歌・俳句等）の一つとされ、和歌は短歌の名称に収斂された。

現代の短歌は、日本で古くからつくられてきた和歌がもとになっている。そもそも和歌、短歌とは何か。紀貫之は古今和歌集の「仮名序」に和歌の本質をこう記す^(注1)。

倭歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、心に思ふことを、みるもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。

（訳：和歌は人の心を種として、それが生長して様々な言葉になったものである。この世の中に生きている人は、関わり合う出来事や行動が多く、それらについて心に思ったことを見る者や聞くものに託し、言葉で表現しているのである）

この一節を根拠にして、和歌、短歌の本質は感情を詠むものと理解されることがある。

「仮名序」の「心に思ふこと」について、安田(2012)は次のように指摘する^(注2)。

「心に思ふこと」とは、感情に限ったものではなく、思想から妄想、幻想、(中略)「理屈」にいたるまで広範囲のものを含んでいる。(中略) 哀しみや嬉しさ、寂しさなどといった感情だけを念頭に置いて「心に思ふこと」といったのではあるまい。

紀貫之が記した「心に思ふこと」は、安田が指摘するように、感情が込められていることが多いが、それだけにとどまるものではない。

和歌（短歌）は、一つの作品が原則的に三十一文字（正確には三十一音）の短詩型で完結する。つまり文字数（音数）が極端に制限される短詩型だからこそ想像力（創造的読み）が発揮できる。折々に出合った物事に自分がどのように感じたのか。そのときの感情だけに矮小化すると、想像力の自由が奪われてしまう。

短歌を抒情（感情を述べること）だけに限定してはならない。書き手が三十一音という小さな器に時々の感情や思い、感覚を込めた言葉で盛るこ

* 東北女子大学

とにより、逆に読み手の想像力を促し、読みの広がり、深さをもたらすからだ。

本稿では、以上に述べた短歌の詩型がもつ特異性を踏まえ、小学校教育においてなぜ「短歌づくり」が必要なのか、その意義と可能性を言語感覚の視点から考察する。

2 理解と表現を往還する短歌づくり

現代では誰もがコミュニケーションの言葉を口にしたたり、耳にしたりする。家庭、学校、会社など、組織の中で良好な人間関係を築き、それを維持、発展させていくには、一人一人のコミュニケーション能力が必要不可欠となっている。

明鏡国語辞典第二版は、コミュニケーションを「ことば・文字・身振りなどによって、意思・感情・思考・情報などを伝達・交換すること」^(注3)と説明する。多様な社会組織の中でよりよく生きていくためには、自分や他人の意思・感情・思考・情報などを適切に伝達し合い、交換していかねばならない。その具体的な手段として、言葉・文字・身振りなどがある。

よって本稿で取り上げる「短歌づくり」においては、コミュニケーションを「言葉を媒介に表現と理解を往還すること」と捉える。

実際、言葉自体を学習の対象にしている国語科では、言葉の働きに気付かせ、それを意識した言語活動を通して、子ども一人一人に言葉の力を身に付けさせることが求められている。

ただし一口に言葉の働きといっても、言葉にはさまざまな作用がある。また研究者によってもその捉え方に違いが見られる。

たとえば岩淵悦太郎は言語の働きを次の4つに区分する^(注4)。こうした簡単明瞭な区分は子どもが言語の働きを学ぶうえで最適なものである。

- ①認識（言語で認識する）
- ②伝達（言語で伝達する）
- ③思考（言語で思考する）
- ④創造（言語で創造する）

この4つの視点で言葉の働きを捉えると、表現と理解の往還が、いかにコミュニケーションの成立に不可欠であるか、理解できる。またコミュニケーションが適切に行われたかどうかの評価（自己評価・相互評価）もしやすくなる。なぜなら表現と理解の往還が適切であれば正しく理解され、逆に不適切であれば誤解される。場合によって、曲解されることもあり得る。

こうした言葉の働きを意識して、適切な言語活動（表現活動・理解活動）をくり返し経験していけば、子ども一人一人に言葉の力が確実に育まれ、充実していくようになる。

短歌づくりという言語活動を小学生（1～6年）に取り組みせる意義は、表現と理解を自然な形で往還させることにある。表現と理解を分断して学ばせるのではなく、あざなえる縄のように関連的、統一的に学ばせていかなければならない。

たとえば表現の立場では、物事や現象を言葉でどう切り取り、それを短歌の器にどう盛るかになる。反対に理解の立場では、短歌に盛られた内容（物事や現象）をどのように想像（思考・認識）し、どう受け取るか（評価するか）になる。

短歌づくりの活動を通して、子どもたちが表現と理解の間を自由に往還する。それは子どもたちの内面に短歌という橋を架け、互いの意思の疎通（コミュニケーション）を適切に図る行為となる。

齋藤孝（2004）はコミュニケーションの役割について次のように述べる^(注5)。

情報を伝達するだけでなく、感情を伝え合い分かち合うこともまたコミュニケーションの重要な役割である。（中略）情報伝達としてのみコミュニケーションを捉えると、肝心の感情理解がおろそかになる。人と人との関係を心地よく濃密にしていくことが、コミュニケーションの大きなねらいの一つだ。

また和歌のやりとりの意義にも言及する。

コミュニケーションの日本的な形態として、

和歌のやりとりがある。五・七・五・七・七の型の中に、あふれる感情を込める。すべてを言い切るわけではない。言葉の象徴性をフル活用する。受け取った相手も、言葉の意味するところを深く読み込む。(中略) この和歌のやりとりによる感情の響き合いは、日本が世界に誇るべきコミュニケーションの型であった。

物事に対する感情や思いについて、書き手自身が切り取った構図に合う言葉を選び、短歌のフォームに仕立てる。読み手はそうした言葉の象徴性や語感を手がかりに歌の意味や状況を読み解く。つまり読み手が自由に想像の翼を羽ばたかせる(想像できる余地を残す)ことで読みに広がりや深さをもたらす。そのためには抽象的な言葉だけで説明せず、その場の状況をイメージできる、具象性をもった言葉で描写する。

だが、言葉を選ぶためには言葉を知っていなければならない。それもできるだけ多くの使える言葉を必要とする。ただ漠然と知っているだけでは、その言葉のニュアンスがわからない。ニュアンスがわからなければ、当然適切には使えない。

たとえ大ざっぱな理解でも、くり返し使っていれば使い方が修正されてくる可能性はある。言葉は使い続けなければ、上手く使えるようにはならない。自分の中で十分にこなれていなくても、使ってみる勇気や機会が必要である。と同時に知っている言葉のニュアンスを捉えて、実際に使える言葉にしていく不断の努力が欠かせない。

茂木健一郎(2019)は言葉の使用について脳科学の視点からこう述べる^(注6)。

言葉を多く使いこなせるということは、それだけ多くの鏡を自分の周りに置いているということです。使いこなす言葉が多ければ多いほど、自分をよりよく映し出す鏡をたくさん持つことになります。(中略) 言葉には、その言葉を使うべき文脈があります。ここぞというベストのタイミングで使ってこそ、言葉

が生きてきます。

3 感情表現と言語感覚を磨く短歌

前述した通り、短歌は物事に触発されて生じた自分の感情や思いを五句三十一音で自由に表現する詩型である。しかし感情と思いを厳密に区別するのは殊の外難しい。なぜならこれらの言葉は意味のうえで地続きになっているからだ。たとえば新明解国語辞典第七版は、思いの意味として、考え、想像、愛情などとともに気持をあげている。同様に広辞苑第七版、精選版日本国語大辞典でも、思いの意味の一つに気持を載せている。感情はどの辞典でも気持の意味で言い換えている。

辞書的意味はニュアンスの違いを別にすれば、思い・感情・気持は同じような意味と捉えて、特に差し支えない。

小学生を対象にした短歌づくりでは、思い・感情・気持をそれぞれ区別するよりも、感情一つに統合した方がわかりやすい。以下、思いや気持を含めた「感情」という言葉で述べていく。

人の感情は「喜怒哀楽(喜び・怒り・悲しみ・楽しみ)」や「快・不快」「好悪」という大きな括りで捉えるとわかりやすい。だが、それはあくまでも代表的例である。一つの括りにすぎない。実際の感情は一瞬一瞬複雑化し揺れ動く。物事の変化に敏感に対応するからだ。だからこそ感情は奥深く、表現方法も多種多様になる。同じ事象(出来事、情景)でも、見方や考え方、感じ方、知識や語彙の量などで捉え方が異なってくる。

たとえば感情を表す「あきらめる」という言葉の類似語をあげてみる。

【見限る】…見込みがないと判断する。

【放り出す】…あきらめてやめる。

【投げる】…途中で放棄する。

【断念する】…きっぱり思い切る。

【観念する】…覚悟する。

このようにニュアンスの違いにより、多様な言葉の選択が可能となる。

因みに感情を表す言葉をポジティブとネガティブとの観点で分け、分析・考察した研究がある^(注7)。

そのような知見をもとに、感情を表す言葉を分類すると、以下ようになる。

[ポジティブ]

【喜び】【楽しさ】【安心】【感動】【感謝】【期待】
【勇気】【喜び】【幸福】【興奮】…

[ネガティブ]

【怒り】【寂しさ】【不安】【不満】【悲しみ】【恥】
【落胆】【後悔】【嫌悪】【恐怖】…

感情を表す言葉は実に多種多様である。その時々の一瞬の感情を的確な言葉で表すためには、何よりも使おうとする言葉のニュアンスを捉えていなければならない。一瞬の感情にできるだけぴったり合う言葉をさがしたり、表現を工夫したり、使用例を見つけたりする努力が欠かせない。こうした日常の積み重ねが自らの表現力を正しく豊かにし、言語感覚を磨くことにつながる。

4 観察と観点、五感、描写

見慣れた風景や物事でも観点を変えて注意深く観察すると、それまで見落とし見過ごしていた事実気付かされる。観察の観点が変われば、認識も変わる。新たな現象に違和感や疑問、感動が生まれ、対象の捉え直しが行われるからである。

本稿では、観点によって対象を注意深く捉え直す行為を観察と呼ぶ。

同じ対象でも認識に違和感(ズレ)が生じると、それが疑問や感動を呼び起こす。なぜだろう、不思議だなと思う好奇心がかきたてられる。こうした感覚は誰しも経験しているものだ。最初は気にとめず漠然と眺めていた事象でも、観察を通して初めてある事実や物事の本質、正体に気付く。

子どもの学びを充実・発展させていくためには、その場で注意深く見聞きしたり、調べたり考えたりしたこと(=インプット)を言葉で表現すること(=アウトプット)に結びつける必要がある。学び続ける力(理解と表現を往還し認識を更新していく力)は、そうして育っていく。

子どもたちに観察を指導するうえで欠かせない言葉の意味(概念)を以下にまとめる。

【観点】 観察するときの見方や着眼点。【五感】

人間が感じることができる五種類の感覚。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚。【描写】 具体的に想像できるように対象を生き生きと写すこと。

短歌づくりの要諦は、手垢の付いた、紋切り型の表現をしないことに尽きる。言い換えれば、自分の五感で捉えた事実や本質、感情などを読み手に伝える場合、具体的イメージが伴うように表現を工夫する。それには、短歌に詠み込む対象をさまざまな視点から眺め回し、新しい発見や気づきを得られるよう詳細に観察する。また観察範囲を絞ったり、広げたり、俯瞰したり、仰ぎ見たりしながら、五感を縦横に働かせ、心を捉える一瞬を的確に描写する。たとえば、

- ①目で捉える(明るい・小さい…)
- ②耳で捉える(静か・うるさい…)
- ③鼻で捉える(くさい・芳しい…)
- ④手・膚で捉える(堅い・温かい…)
- ⑤口で捉える(辛い・甘い…)

といった、できるだけ鮮明なイメージが浮かぶ表現を心がける。ただしその場の状況を一方的に説明する「うれしい」「楽しい」「きれい」など、一語で感情を表す形容詞に頼りすぎてはならない。あくまでもそこに使われている具体的な言葉や表現を手がかりにして、読み手が自由に想像できる(想像の翼を広げられる)ように表現を工夫する。一つの短歌作品は読み手の主体的参加(解釈)によって初めて完結する。

5 感覚の描写とオノマトペ

日本語は他言語と比較して、オノマトペ(擬声語、擬音語、擬態語)の種類が豊かだといわれる。実際、日本語のオノマトペは感覚的言葉で、造語しやすい性質をもつ。物事や現象、あるいは自分の感情や行動、状況を伝える場合、イメージさせやすいという特徴がある。昔からインパクト(瞬発力)が強い言葉として使われてきた。『古事記』『源氏物語』など、歴史的作品にも情景描写等の用例がある。

オノマトペ（オノマトペア）は擬声語・擬音語を意味するフランス語である。広義には音声を伴わない抽象的な様態を描写した擬態語を含む概念として使われ、日本語（特に大和言葉）の表現に欠かせない豊かさや深みを与えている。対象を観察する場合、固定観念にとらわれず、五感を働かせて捉えたり、自分なりの発見や気付き、感覚をわかりやすく伝えたりするうえで、オノマトペは有効な表現方法である。

一般にオノマトペは擬声語、擬音語、擬態語の総称として使われるが、本稿では擬声語を含めた擬音語と擬態語の二つに大別して使用する。ただし同じ言葉が擬音語、擬態語の両方に使われて、一つにまとめられない場合は、文脈によりどちらの意味かを判断する。以下に示すオノマトペのうち、擬音語の「ばちばち」、擬態語の「ばんばん」がそれにあたる。

〔擬音語〕 物音や動物の鳴き声など、実際に聞こえる声に近い形で写しとったもの。

【びよびよ】 ひな、ひよこなどの鳴く声。

【ばちばち】 ①続けざまにひびく鋭く小さい音。

火の強くはせて燃える音。放電などの音。手を続けて打ち鳴らす音。また、そのさま。②カメラのシャッターを次々に切る音。また、そのさま。③しきりにまばたきをするさま。④こまかい模様のごさま。⑤服の寸法がきつなさ。

*①～②は擬音語・擬態語、③～⑤は擬態語。

〔擬態語〕 人や物事の様子・状況など、実際に聞こえないことを感覚的な言葉に表したるもの。

【ばんばん】 ①手を打ち合わせたり、手でものをたたいたりする高い音。②続けてものが破裂する音。ぱーん。③ものがはちきれそうにふくらんでいるさま。*①～②は擬音語、③は擬態語。

【のろのろ】 動きがにぶく、遅いさま。

*【びよびよ】【ばちばち】【ばんばん】【のろのろ】の分類・語義は『日本語オノマトペ辞典』（小学館2007）による^(注8)。

オノマトペは老若男女を問わず、日常生活で頻繁に使われている。今も昔も日本語のコミュニケーションに欠かせない便利な言葉である。

たとえば、「おいしそうにご飯がたけた」と表現するよりも、「ほっかほっかで、あつあつのご飯が炊けた」というオノマトペを使った表現の方が味覚、触覚、視覚を刺激するイメージが喚起されやすく、一層おいしそうに感じられる。

オノマトペは幼児の遊びや絵本、児童文学作品（童話・物語）などに数多く出てくる。したがってオノマトペに着目すれば、相手（登場人物）の様子や気持、状況を具体的に想像したり、逆に自分の様子や気持、状況を相手（読み手・聞き手）にわかりやすく伝えたりしやすくなる。

幼児期・児童期はオノマトペが豊かに使われている児童文化財（言語学習材）にふれる機会が多い。子どもの言葉に対する感性は、児童文化財にふれる体験を通して磨かれる。それに伴い言葉による創造力、思考力、伝達力、表現力も育っていく。

オノマトペはイメージを喚起し、伝える意味や感情を描写する機能をもつ。その証左として、小学生がつくる短歌にも自然に出てくる。

筆者が編集に関わった全校歌集（一人一首、合計293首^(注9)）について、オノマトペの種類と出現数を調べた結果「表-1」を示す。

〈全校歌集で確認したオノマトペ〉

*印は擬音語と擬態語の両方に使われている。

【擬音語】(13種類)：ごろごろ どん はあはあ
びゅーびゅー ひゅーひゅー ぼたぼた
びゅーどん ちりちり びゅーびゅー しゃり
しゃり *がたがた みんなん *どんどん

【擬態語】(50種類)：ほこほこ ぐるぐる
ぼかぼか ときどき びかり すいすい もり
もり きらきら わくわく ぐらぐら ひらひら
ばらばら *ぼたぼた ふうん ふわっ
だんだん にこにこ ひんやり びしょびしょ
びっしょり ばくばく さっさ ぽーっ
どってんころりん びっくり すっきり

しっかり ペこペこ きーん きらり
 ぷくうっ つるつる くるくる ほうほう
 じりじり うんざり にっこり ゆらゆら
 *びゅんびゅん びよん ころころ じんじん
 ぱくり そろそろ ほっ ゆっくり かつくん
 せっせ ちょこん ぽきっ

表-1 オノマトペ(擬音語・擬態語)の出現数

学年		歌数	擬音語(16)		擬態語(75)		オノマトペ(91)	
低	1年	44	2	8	10	24	12	32
	2年	59	6		14		20	
中	3年	41	3	5	13	24	16	29
	4年	57	2		11		13	
高	5年	43	1	3	20	27	21	30
	6年	49	2		7		9	

※上表の擬音語は擬声語を含む。数え方は一首に複数回使用しても、擬音語1、擬態語1とした。

表-2 文末/文節末に付く終助詞の出現数

学年		歌数	な	なあ	ね	よ(76)		ぞ
低	1年	44	4	0	3	17	32 42%	1
	2年	59	9	1	7	15		6
中	3年	41	7	0	4	18	32 42%	1
	4年	57	5	3	4	14		1
高	5年	43	4	0	3	7	12 16%	4
	6年	49	2	0	1	5		3

学年		か	かな	全終助詞(166)		
低	1年	0	2	27	71	132 80%
	2年	0	6	44	43%	
中	3年	0	2	32	61	
	4年	1	1	29	37%	
高	5年	1	1	20	34	34
	6年	2	1	14	20%	20%

※数え方は、一首に同じ終助詞を複数回使用していても1とした。また一首に異なる終助詞を使用している場合は、それぞれ1とした。

- 各学年とも擬音語より擬態語の出現数が多い。これは擬音語・擬声語が動物の鳴き声や物音を音写した言葉で使用する機会が限られるのに対して、擬態語は人や物事の様子、状況を感覚的に(感情を含む)表した言葉で擬音語よりも使用機会が多いことが原因であると推測する。
- 低・中・高では、擬態語の出現数に極端な偏りが見られない。これは日常生活で相手にさまざまな様子・状況を具体的に伝える場合、擬態語が欠かせないことを示す。

6 感情を表す終助詞と短歌の定型

日本語表現では、終助詞は文または文節の終わりについて、疑問・禁止・詠嘆・感動など、話し手の気持を表す言葉である。

たとえば終助詞の、「よ」「か」「な」「なあ」「ぞ」「ね」「かな」は、自分の感情(感動)をはじめ、判断・依頼・勧誘・決意・確認・疑問・質問・推量・希望などを相手に伝える機能をもつ。

こうした終助詞の使用について、前出の全校歌集で調べた結果「表-2」を示す。

- 終助詞の全出現数の80%を低・中が占める。これは低・中が相手に話しかける意識が強く、終助詞が定型の音数調整に便利なためと推測する。
- 終助詞の全出現数(166)の46%(76)を「よ」が占め、そのうち84%(64)が低・中に出現している。これは「よ」が相手に強く伝える気持を表し、さまざまな語(体言・活用語・助詞等)に接続しやすいためと推測する。

短歌づくりをはじめて間もない頃、子どもたちは、五・七・五・七・七の定型(=制約)に苦労する。特に1学年は他学年に比べて負担が大きい。五音・七音のパーツを意識しながら、言葉をさがしたり、音数調整をしたりしなければならぬからである。

だが全く心配はいらない。1学期を過ぎてひらがなが読み書きできる頃になると、左程苦労しなくなる。自分が見聞きしたり経験したりしたことを先生や友だちに伝えようとする思いや気持が育ってくると、短歌の定型は子どもを苦しめるものではなくなる。むしろ子どもの漠然とした思いや気持を明確なフォーム(形)に仕立てる魔法の

杖に変化していく。

子どもたちは音数を指折り数えて、定型に合わせる体験（苦労）を重ねていくうち、日本語の安定した調べ、五音・七音のリズムに馴染んでくる。結果、漢語や外来語とは違う日本固有の大和言葉の響き、深さに自然に気付けるようになる。

7 言葉の働きと言語感覚の重要性

改訂小学校学習指導要領・国語^(注10)の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成することである。そのために「言葉がもつよさを認識するとともに、言語感覚を養い、国語の大切さを自覚し、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」ことを求めている。

これを受けて、[第1学年及び第2学年]の内容〔知識及び技能〕は、「ア 言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと」を設定している。同様に、[第3学年及び第4学年]は、「ア言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付くこと」、[第5学年及び第6学年]は、「ア 言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くこと」を設定している。

以上から、各学年に共通するのは、適切な言語活動を通して、その学年で求める言葉の働きに気付かせ、自覚させていく指導である。

言葉の働きは、語彙の指導項目で、[第3学年及び第4学年]の「オ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使う」、[第5学年及び第6学年]の「オ 思考に関わる語句の量を増し、話や文章の中で使う」など、関連指導で効果をあげるように求めている。

「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成するためには、「言葉がもつよさを認識」し、「言語感覚を養う」ことが欠かせない。語彙は理解できるだけでは不十分である。実際に使用できなければならない。量的には多い方がよい。言葉の理解と表現は表裏の関係にある。言語感覚（言葉のセンス）は両者をくり返し往還する

ことにより磨かれていく。

言葉の働きを意識して、相手の言葉から意味や感情を読み取る行為と、自分の考えや感情を言葉にして相手に伝える行為はセットである。こうした言語意識は子ども一人一人を「主体的・対話的で深い学び」へ導くうえで欠かせないものだ。

8 表現力と想像力を鍛える定型

短歌の定型（五・七・五・七・七）は古事記、万葉集の時代から千三百年以上守られてきた。

古事記にはスサノオノミコトが詠んだとされる日本最古の短歌が記されている。

八雲立つ／出雲八重垣／妻籠みに／八重垣作る／その八重垣を

歌意は「幾重にも湧き立つ雲が八重垣となり、出雲の地に妻と住む」。八重垣が三度くり返され、情景と喜び（祝婚）の感情が強くりズミカルに伝わってくる。先人はこの詩型を使って、物事に抱いた時々の感情を、五音・七音の調べを伴うフォーム（形）に仕立てあげた。

別な言い方をすれば、短歌は定型という制約があったからこそ、千三百年以上も継承されてきた。書き手（話し手）は何をどのように表せば、読み手（聞き手）が適切に受け止めてくれるかを考える。反対に読み手（聞き手）は書き手が何を伝えたかったのか、なぜそのように表したのかを想像する。選んだ言葉による定型表現を介して、思考力・想像力を働かせ、互いに意思疎通を図る。後世、短歌に修辞法が発達したのは必然であった。

しかし小学生の短歌づくりは「修辞法ありき」ではない。五・七の定型に自分の考えや感情を、限られた言葉でいかにまとめるか、それが重要である。修辞法は相手に伝える方法として有効だが、こだわりすぎると、子どもを短歌嫌いにさせてしまう。作歌のレベルや必要に応じて学び、そのよさに気付き、自ら使うのが王道である。外形だけ整えた歌をつくっても、表現したい欲求や内容が損なわれていたら、考えや思い、感情は伝わらない。学級歌集、全校歌集に短歌を載せる際は、そうした基本スタンスを自覚したい。

以下、前出の全校歌集を対象に修辞法の種類と出現数について調べた結果「表-3」を示す。

〈修辞法の種類〉体言止め：結句を体言で収める技法。比喻：あるものを説明するときに似たもので表す技法。倒置法：言葉の順序を普通と逆にする技法。リフレイン：同じ部分をくり返す技法。擬人法：ものや動物を人に見立てる技法。

表-3 修辞法の出現数 全技法数(120)

学年	歌数	体言止め(77) 64%		リフレイン(18) 15%	
低	1年	44	11	24	2
	2年	59	13		3
中	3年	41	6	22	1
	4年	57	16		8
高	5年	43	16	31	1
	6年	49	15		3

学年	擬人法(8) 7%	倒置法(7) 7%	比喻(10) 8%	全技法数
低	1年	1	1	4
	2年	1	3	
中	3年	0	0	5
	4年	2	2	
高	5年	1	0	1
	6年	3	1	

* 数え方は一首に同じ修辞法を複数回使用しても、1とした。また一首に異なる修辞法を使用している場合は、それぞれ1とした。

- 低・中・高学年とも体言止めが多く出現した。これは体言止めが収まりがよく、きっちりした印象を与えるためと推測する。
- この小学校では短歌の修辞法を教えていない。国語科等で学んだ修辞法が短歌づくりに反映され、感情表現の幅を広げていると解釈する。

9 短歌づくりの意義と課題

小学生に短歌をつくらせる活動を否定する人もいる。確かに短歌は大人の文芸とされてきた歴史がある。しかし日本最古の歌集・万葉集には天皇や宮廷歌人の歌だけでなく、一般庶民が詠んだ素

朴な歌も収録されている。共通するのは短歌の詩型に伴う五音・七音の調べである。日本語、特に大和言葉は五音・七音の調べに乗りやすい性質をもち、日本人の根源的リズムを形成する。短歌は自分の考えや感情を自由に表現し、相手とコミュニケーションを図る対話ツールといえる。

短歌づくりは小学生の言語意識を高め、言語感覚を磨く、最適な言語活動である。短歌づくりを遊び感覚で体験し継続する意義と可能性は計り知れない。今後の課題としては、場面の切り取りや語彙の指導、他教科との関連性があげられる。

[参考文献・資料]

- ・渡部泰明編『和歌のルール』(笠間書院 2014)
- ・山口伸美編『擬音語・擬態語』(講談社 2015)
- ・北原保雄編『明鏡国語辞典第二版』(大修館 2010)
- ・山田忠雄編『新明解国語辞典第七版』(三省堂 2013)
- ・新村出編『広辞苑第七版』(岩波書店 2018)
- ・『精選版日本語大辞典』(小学館 2006)
- ・横山未来子『やさしい短歌のつくり方』(日本文芸社 2015)
- ・沢辺有司『図解いちばんやさしい古事記の本』(彩図社 2016)
- ・岩渕匡他編『日本文法用語辞典』(三省堂 1990)
- ・全国大学国語教育学会編『小学校国語科教育研究』(東洋館出版社 2019)
- 注1 紀貫之「仮名序」『古今和歌集』(角川書店 2007)
- 注2 安田純生「抒情」『短歌のツボ100』三枝昂之編(角川学芸出版 2012) 125 頁
- 注3 北原保雄編『明鏡国語辞典第二版』同上
- 注4 田近洵一他編『国語教育指導辞典第五版』(教育出版 2018) 271 頁
- 注5 齋藤孝『コミュニケーション力』(岩波書店 2004) 2-3 頁, 156-157 頁
- 注6 茂木健一郎『「書く」習慣で脳は本気になる』(廣済堂出版 2019) 145 頁, 147 頁
- 注7 苔米地英人『「感情」の解剖図鑑』(誠文堂新光社 2017)
- 注8 小野正広編『日本オノマトペ辞典』(小学館 2007)
- 注9 平川市立金田小学校『平成 26 年度 全校歌集“金田っ子”』(金田小学校 2015)
- 注10 文部科学省『小学校学習指導要領(平成 29 年 告示) 解説国語編』(東洋館出版 2018)